印賀鋼と刀剣

９月２５日（金）から１０月１１日（日）、日南町美術館では、伯耆地方に伝わる刀剣とその歴史を紹介する企画展「古伯耆物の系譜～伯耆における刀剣の歴史～」が開催された。

文化６年（１８０９年）青砥孫左衛門が『印賀鋼』の商標で、地元産の鋼を売り出し、市場でも日本一の鋼として取引された。当地の鋼をブランド化したのである。現在でも、鋼を使って商品を作っている全国の地域では、「印賀鋼」は有名である。

このたび日南町美術館で展示されたのは、刀剣が主であるが、その刀剣の材料である「玉鋼」も展示された。印賀鋼が展示されたのである。全国の刀匠の中でも、昭和になってからでも、当地を訪れたり、知人を頼ったりして「印賀鋼」を求めたと解説され、印賀鋼の素晴らしさを知った。このたびの展示のなかでも、印賀鋼を材料にした二振りの刀剣が展示されていた。

寛政8年（1796）に江戸にて作成された刀　印賀鋼製）

印賀鋼とある

短刀　人間国宝　故宮入行平作（印賀鋼製）

奈良の春日大社で「古伯耆物」と呼ばれる刀剣展が昨年 12 月 28 日から本年３月１日まで開催された。日本刀の祖とも呼ばれる、大原安綱作の「童子切」が初めて東京国立博物館から貸し出された。その際にも、展示の一つとして、『印賀鋼』が展示された。キャプションには、「大宮地域振興センターに年中展示されています。」と掲載されていた。

大宮地域のお宝である『印賀鋼』も日南町の宝であり、鳥取県の宝である。このたびの企画展では、１ 日 200 人程度が最高の入館者数で、ほぼ毎日 40 人程度の入場者があったそうだ。興味をお持ちの方々が県内はもちろん全国各地から情報を聞きつけてやって来られ、入館された。

大宮まちづくり協議会としても、大宮のお宝として『印賀鋼』の伝承活動に取り組んでいくことが必要だとこのたびの企画展を通して感じた。

≪お問合せ≫

大宮地域振興センター

〒689-5531
鳥取県日野郡日南町印賀 1516
TEL・FAX (0859)87-0911

Mail：skn0400@town.nichinan.tottori.jp
satoyamaoomiya@sea.chukai.ne.jp
blog：http://blog.zige.jp/satoyamaoomiya/
“じげブロ”よりお入りください

編集・発行：大宮まちづくり協議会　総務部

【編集デスク】

◆総務学習部では、まちづくり協議会の組織改編に伴い、新しく５か年計画の作成を計画している。本年度の鳥取大学地域学部筒井教授の「むらおこし論」との連携事業である。12 月中には、事業の見直しなどをみなさんで考えていただくためのアンケート調査を計画中である。◆稲刈り真っ最中である。今月号と次号で「大宮の農業」を特集する。農地を守るための対策を考える必要がある。現在、鉄穴谷地区では、圃場整備の工事が始まった。（青）

秋たけなわの候　鳥取名産の 20 世紀梨、ブドウ、リンゴとおいしい果物がテーブルに並び、外では田んぼで稲刈りが真っ最中。山にはシバ栗、あけび、こうたけやまつたけが・・・。

食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、睡眠の秋、芸術の秋、紅葉の秋、趣味の秋など、秋のよさを表している言葉がたくさんある。コロナ禍ではあるが、この秋を楽しもう。

大宮の農地を守る

以前は谷あいまで開墾され、稲作が行われてきた。農業従事者の高齢化や農業後継者不足にともない、いわゆる耕作放棄地が増えてきた。町内でも耕作放棄地が多い大宮地域である。そんななかで、農地を守り、地域農業に取り組んでいる人たちを２号にわたって取り上げてみたい。これからの大宮地域の農業について考えてみましょう。

地域農業を守る
株式会社ファームイングの若者たち

印賀・宝谷地区を中心に、水稲約３０ha とハウストマト約１ha の耕作、栽培を手掛ける株式会社ファームイング。1996 年（平成 8 年）の設立以来、地域農業の担い手として、また農業だけでなく地域のコミュニティになくてはならない存在になっています。

設立時から社長としてファームイングの礎をつくり、鳥取県でも有数の農業法人を築いた古都久志さんは現在会長に就任。2018 年からは岩田真也さんが社長を務めています。

地域の人たちから信頼されるようがんばると話す岩田社長と安達部長

岩田社長は、２５歳の時に前職の証券会社を退職し、Ｕターンしてファームイングに就職。それから勉強を重ね、今では JA 鳥取西部の日南トマト生産部長をも務め、ファームイングだけでなく、日南町の農業発展にも努めています。

そんな岩田社長を中心に、ファームイングの２０代、３０代の若い従業員６名が日々頑張っています。

営農部長の安達翔さんは、高校を卒業してすぐに農業の世界に飛び込みました。先輩の教えもありメキメキと営農技術も上達し、今ではファームイングの営農全般に目を配っています。

営農係長の坂根啓典さんは、鳥取市出身。鳥取県のアグリチャレンジ研修生修了後ファームイングに入社。同じく営農係長で、岡山県神郷町から通勤している田邉峻一さんと二人で、相談しながら最高の日南トマトを追求しています。今では、トマトの１０アール当たりの収量は日南町で一番になり、さらにやる気に満ち溢れています。

最高のトマトを目指して切磋琢磨する両係長

内藤三千雄さんは、元自衛官。農業に魅力を感じファームイングに入社しました。

内藤さんは、農業から IT 関係のことなど、なんでも瞬時に調べてくれるため、みんなの事典の役割を担っています。先輩の指導を受け、確実に営農の力をつけています。

トマトの知識をもっと広げたいと話す内藤さん

早起きはきついときもあるが（笑）毎日充実していますと話す井内さんと平岡さん

そして今年４月。平岡良基さんと井内崇人さんが入社。冷静に判断してテキパキと動く平岡さんと、ファームイングのムードメーカになりつつある井内さんは、先輩の指導を受け、一つ一つ確実に作業を進めています。

若い力が加わり、地域農業を支えるファームイングの七人衆

仕事が終わったファームイングを訪ねると、笑顔で話をしている楽しそうな姿に出会いました。

早朝からの仕事で疲れているはずなのに、みんなにぎやかに話しがはずんでいました。その姿は、毎日充実して仕事に励んでいると感じました。

そんな若い力で地域の農業をけん引しているファームイングの存在はとても頼もしく、彼らの存在無くして、地域農業を守ることはできないと言っても過言ではないと感じました。